

長春日本人教師会勉強会 100 回記念講演会記録

講演 1 記録

講師：藤村知子 先生（中国赴日本国留学生予備学校，東京外国語大学留学生日本語教育センター教授）

題目：『文章構造に着目した読解指導—接続表現の観点から—』

内容：

文章構造を分析する観点のうち、接続表現を取り上げ、接続表現を活用することによって、文脈の展開を確認し、概要理解に結びつける読解指導について紹介されました。

1. 日本語教育における読解指導

外国人の日本語学習者が日本語の文章を読むには、96%の既知語が必要であるがこれは極めて困難である。スキーマでトップダウン処理する。内容スキーマは無理なので、形式スキーマによって不足している語彙を補って理解できる。

2. 文章構造分析の形態的指標

接続表現・指示表現・反復表現・省略表現・提題表現・叙述表現について、接続表現を中心にして、「中級日本語」の例文や類型の表などを用いて説明された。

3. 中級レベルの読解指導への応用

文章をできるだけ速く正しく読むのに役立つこととして、接続表現・指示表現・提題表現・叙述表現の分析がある。

文章構成の型（文章型）の分析をする。主題文の位置によって次の6つに分類できる。尾括型・頭括型・中括型・両括型・散括型・無括型

4. 今後の課題 文章から談話（独話）への応用と談話特有の現象の指導

5. まとめとして 文章や談話の構造を言語形式からおさえることができる・日本語の教科書では言語形式が段階的に（ばらばらに）提示される・ある時期に文章と談話構造に関わる言語形式をまとめて提示する必要がある・教材リソースとして JPLANG の利用を

パワーポイントと資料1（A4 2枚）と資料2（B4 1枚）で、濃い内容を短時間で講演していただきました。

感想として、精読の授業や会話などの指導にすぐ応用できる内容が多かったように感じました。日本の高校の現代国語でも類似の指導がされているそうです。同行した学生は N1 や N2 の読解問題でも応用できると喜んでいました。

文責：長春大学 栄井 敬介

講演 2 記録

講師：平野宏子先生（中国赴日本国留学生予備学校）

題目：『オンライン日本語アクセント辞書 OJAD と音声学習支援』 <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>
内容：

OJAD（オージャッド／Online Japanese Accent Dictionary）は、去年の8月公開以降、アクセス数は2万3千件、95カ国で使用されています。中国では長春の利用者が51.91%を占めています。

音声の指導法には、暗示的指導（教師の音声をリピートさせる）と明示的指導（具体的な誤り・不自然性の指摘）の二つがあり、OJAD はそのいずれの指導法にも効果を発揮します。単語検索をすると、単に一つの単語の音声だけではなく、基本的な12の活用形の音声データが網羅されています。学習者はこれを聞き比べることによって、アクセント規則を学ぶことが出来ます。また、「音律読み上げチュータ・スズキクン」の機能を使えば、単語や句だけでなく、センテンスのピッチパターンを図示できるので、音声を視覚的に学ぶこともできて、学習者の具体的な誤りを正す手がかりとなります。

音声指導の難しさは、「文法などと違って、何が間違いか、はっきり言えないし、わからない」点にあると考えられます。教師は「何を指導すればいいか、指導法がわからない」という状態に陥っているのではないのでしょうか。それは既存の教材が少ないこと、指導法においても研究が少ないということに原因があるようです。学習者は音声をしっかり学びたいというニーズがあるのに、教師側は指導法や教材などの適切な情報を持っていないというのが現状です。そこで OJAD はインターネットで無料で誰でもアクセスできるので、学習者の自学も可能であり、教師にとっても有効な副教材としても役に立ちます。

しかし現状では日本語だけのサイトであり、初級者には学習の上での困難が予想されます。中国語版の開発が急務です。「どなたか、ご協力ください」とこのことです。

レポートの作成に当たっては、平野先生の p p t 資料と、
「OJAD 4 機能のご紹介」<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/pages/usage> を参考にしました。

文責：長春中医薬大学 古賀 克彦

講演 3 記録

講師：田原洋之氏（長春図麗光学有限公司，技術部部长&技術指導）

題目：『企業が学生に求める能力』

内容：

2001 年広東赴任以来、間にフィリピン 1 年勤務をはさんで 13 年に及ぶ中国駐在生活を続けていらっしゃる田原洋之氏の講演は、6 月から上海へ転勤することになった経緯から始まった。

上海の販売会社には、日本語が話せる社員が 10 人ぐらいいて、社内では日本語でコミュニケーションはうまく取れるのに、全然仕事がかうまういかない。仕事がかうまういかないのは、彼らに商品知識がなくカメラの使用方法も十分知らないために、顧客に説明ができないからだ。必要なのは、写真の撮影の仕方やレンズの使い方など技術的アドバイスができることであり、それが宣伝・販売に直結している。日本語が話せるだけでは仕事にならない。

①企業が嫌われる学生とは「三高」すなわち高い役職(管理職)・高い職種(高度な専門職種)・高収入を求める学生だ。

2013 年の大卒者は 700 万人でそのうち就職が決まっているのは 38%に過ぎず 2008 年以来史上最低と言われる。しかし、一方で昨年の統計では就職者の 30%が半年以内でやめている。大卒者にとっては厳しい時代だ。大卒だからと言って大学で学んだものがそのまま使えるわけではなく、3 年は基礎から実際に勉強しなければなかなか使えない。

②日本語能力よりコミュニケーションの能力が大切だ。

中国へ赴任した当時中国語が全然分からなかったが、漢字による筆談や数式、英語でもコミュニケーションがとれた。要するに、内容スキーマが一番大切だ。しかも光学関係の設計図など英語がほとんどだ。正しい日本語が使えても、内容の説明ができなければ役に立たない。

現在では日系企業は日本語ができるかどうかを、社員の採用にあたって重視していない。日本語が話せる人材が欲しいわけではなく、日本語も話せる人材を求めている。財務ができる、法律に詳しい、物理や化学、数学、電気など技術につながる力を重視する。だから、日本語以外の専門性+日本語が必要だ。その日本語以外の専門を一つ自分で勉強し身につけてほしい。

日系企業は 2005 年までは通訳を必要としていたが、今はそうではない。通訳は中小企業で社員 100 人に 1 人、大手の会社では社員 1000 人に 3 人もいれば十分で、しかも、多くの会社では既に充足しているし、通訳の仕事は多くない。現在の日系大企業では、中国派遣前にかんがりの中国語研修をおこなっている。また通訳ではなく、技術や財務専門の中国人社員を日本に派遣し日本語の研修と専門技術研修を行う方向に変わりつつある。

また、現在の通訳は 30 歳前後で、彼らが働いている企業ではこれから 20 年は新規採用がないと考えたほうがいい。

③クリエーションのすすめ

学校で勉強したことだけで十分ということは全くない。ましてや、学校で習い暗記したことをそのまま口にする人が多いし、その範囲内で処理をしようと思うからうまくいかない。さまざまな力を身につけ、日本語能力に肉付けすることが必要だ。言葉以外にどういうことに興味を持って勉強していくかが大切だ。映画鑑賞とか音楽鑑賞など受身的な趣味ではなく、積極的にかかわり合う、そういう趣味をもってほしい。受身的な享受では何の発展もない。どうすればもっとよくなるか、と追求するクリエーションが重要だ。日本語能力に優れている皆は、日本語と中国語の二つを使って、法律や財務、技術的なことなどいろいろなことを勉強してほしい。それが可能性を切り拓くことだ。

④自分のやりたいことを見つけ、自分のやってきたことを統合する、それが未来を切り開くことだ。

文責：長春理工大学 家田 修